

◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。
◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

乳用牛

◇ 夏季の飼育管理

(1) 温度や湿度の対策

自然換気を促すため、牛舎内の障害物を取り除き、風通しをよくする。送風機を利用する場合は、牛舎だけではなく待機場にも設置し、牛体の背中や胸に風が当たるように、角度と向きを調整する。また、送風効率を上げるため、定期的にファンの掃除を行う。牛舎内の温度上昇防止には、西側から直射日光が入らないよう日よけを設置したり、屋根に散水したりすると効果的である。

(2) 飼料給与

採食量を確保するためには、新鮮な水を十分に摂取させることが最も重要であり、ウォーターカップ等の飲水設備は常に清潔に保つとともに、複数の牛が同時に飲んでも十分な水量を確保する。また、夏季はミネラルの要求量が通常時より10%以上増加するので、鈣塩等は十分な量を設置するほか、飼料中のミネラル含量を高める。

暑熱時の採食量は、日中に大きく低下し、夜間や明け方に増加する傾向があるため、夜間の給与量を増やす。TMRを給与する場合は、2次発酵による嗜好性や栄養価の低下を避けるため、少量を複数回に分けて給与する。

(3) 高温による疾病対策

熱射病(体温の上昇と呼吸数が増加)になった牛には、冷水をかけて体温を下げるとともに、重曹水(重曹100~200gを1Lの水に溶かす)を飲ませると効果的である。

肉用牛

◇ 夏季の飼育管理

(1) 温度や湿度の対策

牛舎には湿気がこもらないように、窓の開放や換気扇により十分な換気を行うとともに、通風を妨げるような資材や機材等は置かないようにする。牛舎内外や牛体への直接の散水も効果的である。

また、群飼している肥育牛の採食量が低下した場合は、1群あたりの頭数を減らすなど、牛のストレス軽減に努める。

(2) 飼料給与

夏季は、飼料の採食量が低下するので、飼槽を清潔にして飼料の変敗を防ぐとともに、栄養価が高く良質な粗飼料を、十分に摂取できるように心がける。また、飲水設

備はこまめに洗浄し、新鮮な冷水がいつでも十分に飲めるようにする。

特に暑さが厳しい時期は、飼料の給与回数を増やしたり、夜間など涼しい時間帯に給与量を増やすなどの工夫をする。また、定期的にビタミン剤やミネラル剤を投与する。

豚

1 夏季の飼育管理

- (1) 豚は高温多湿に弱いので、窓の開放、換気扇や扇風機などにより、舎内の換気をよくする。
- (2) 子豚には、扇風機などの風が直接当たらないように、風よけや保温箱を設置する。
- (3) 繁殖豚は、暑さが続くと食欲が落ち、必要な養分量を食い込めなくなるので、朝夕の涼しい時間帯に給与し、15分～30分で食べきる量を数回に分けて与えるなどして、採食量を確保する。また、できるだけ新鮮な冷水を給与する。
- (4) ストールで飼養する繁殖豚には、首や肩の部分に水滴を滴下させるドリップ・クーリングの冷却効果が高い。
- (5) 種雄豚は、暑さによる造精機能の低下や交尾欲の減退を防ぐため、人工授精との併用により週2回程度の供用とし、交配はできるだけ涼しい時間帯に行う。
- (6) 肉豚は、事故や肉質の低下を防止するため、過密飼育を避け、出荷は朝の涼しいうちに済ませる。

2 衛生管理

国内で豚コレラが発生していることから、「飼養衛生管理基準」に基づき、農場の衛生管理を再点検し、特に次のことを徹底する。

- (1) 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- (2) 病原体を豚舎内に持ち込まないようにするために、豚舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、豚舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
- (3) 豚舎への野生動物の侵入や接触の防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- (4) 日常の観察を徹底し、異常豚の早期発見に努めるとともに、異常豚を発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

鶏

1 夏季の飼育管理

- (1) 飲水設備を点検し、常に新鮮な冷水を飲める環境を整備する。
- (2) 舎内の換気に注意し、カーテンの開放等により風通しをよくする。また、必要に応じて大型扇風機やダクトによる送風を行う。
- (3) 舎内への水の細霧や、屋根への散水を行い舎内の温度を下げる。

- (4) 日よけを設置し、舎内への直射日光を避ける。
- (5) 気温の高い昼間の体温上昇を抑制するため、気温が低下する夜間に点灯して給餌する方法も効果がある。
- (6) 暑熱環境下では血中の重炭酸イオンが低下するため、飼料や飲水に重曹を添加することも有効である。

2 衛生管理

「飼養衛生管理基準」に沿って実施し、特に次のことを徹底する。

- (1) 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒を徹底する。
- (2) 病原体を鶏舎内に持ち込まないようにするために、鶏舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒を徹底するとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
- (3) 鶏舎への野生動物の侵入防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
- (4) 日常の観察を徹底し、異常鶏の早期発見に努めるとともに、異常鶏を発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

草地・飼料作物

1 2 番草の収穫及び追肥

- (1) オーチャードグラス主体草地は、草丈が 70～80 cm となる 7 月中～下旬（1 番草刈取り後 40～50 日）が刈取適期となる。この時期を過ぎると草地内部のムレによる病害や枯葉の増加により、収量が低下するとともに牧草の嗜好性や消化性が低下するので、刈取適期を逃さないように努める。
- (2) 株枯れの防止と刈取後の再生を促すため、刈取高さは 10 cm 以上とする。
- (3) 7 月以降の追肥量は、多すぎると株枯れの発生や牧草への硝酸態窒素の蓄積につながるため、窒素成分で 10 a 当たり 6 kg 程度とする。
また、利用初年目の草地は、経年草地に比べて刈取後に株枯れが生じやすいので、追肥量は窒素成分で 10 a 当たり 3 kg 程度とする。
- (4) 牛尿の散布は、濃度障害を避けるため降雨前後に行う。また、成分推定により肥料成分を把握した上で散布するのが望ましい。（畜産生産情報第 2 号参照）

2 草地の更新

(1) 更新の目安

施肥量に見合った収量が得られなくなったり、裸地が目立つ（採草地で 60% 以上、放牧地で 40～50% 以上）草地、雑草の割合が 30% を超えるようになった草地は、計画的に更新し、生産力の回復に努める。

(2) 土壌診断の実施

更新前に土壌診断を行い、その結果に基づいた土壌改良を行う。

(3) 除草剤の播種同日散布による雑草防除

牧草播種前に雑草を十分に発芽させた後、除草剤を散布し、直後に牧草を播種する

と、雑草が少なく密度の高い草地が造成できる。作業工程は次のとおりである。

ア 堆肥の散布と耕起を行い、石灰質資材を散布して砕土・整地を行う。その後、リン酸質資材を散布し、播種床を造成する。

イ 3～4週間放置し、雑草の埋没株や種子から発生する雑草が十分に出揃ったのを確認し、「ラウンドアップマックスロード」または「草枯らし」を10a当たり500ml(100倍液)散布する。

ウ 散布後、雑草葉面が乾いたら、牧草の播種と施肥を行い鎮圧する。なお、同日播種ができない場合であっても、できるだけ速やかに播種する。

(4) 牧草の混播組合せ

牧草の品種は表1を参考に、牧草の混播組合せと播種量は表2を参考にする。

表1 牧草の青森県奨励品種

草種	品種
オーチャードグラス	アキミドリⅡ、はるねみどり、ハルジマン、まきばたろう、バックス
チモシー	クンプウ、ユウセイ、ホライズン、ノサップ、アルテミス、クライマックス、アッケシ、ヘリオス、キリタップ
イタリアンライグラス	ナガハヒカリ
ペレニアルライグラス	ヤツカゼ2、フレンド、ヤツユメ
メドウフェスク	まきばさかえ
ケンタッキーブルーグラス	ラトー
リードカナリーグラス	パラトン
フェストロリウム	東北1号、那系1号
アカクローバ	ナツユウ、リョクユウ
シロクローバ	フィア、マキバシロ
アルファルファ	ケレス、ウシモスキー

表2 牧草の混播組み合わせと播種量(例)

草地区分	基幹草種	草種	播種量(kg/10a)
採草地	オーチャードグラス主体	オーチャードグラス	2.0～2.5
		シロクローバ	0.3
採草地	チモシー主体	チモシー	1.5～2.0
		アカクローバ	0.2～0.4
放牧草地	オーチャードグラス主体	オーチャードグラス	1.5～1.8
		ペレニアルライグラス	0.8～1.0
		ケンタッキーブルーグラス	0.5
		シロクローバ	0.3
放牧草地	ペレニアルライグラス主体	ペレニアルライグラス	2.0～2.5
		オーチャードグラス	1.0
		ケンタッキーブルーグラス	0.5
		シロクローバ	0.2～0.3

環境保全

1 畜舎汚水の減量化対策

飲水設備等からの漏水は、汚水量の増加や衛生環境の悪化の原因となるので、点検・補修を怠らないようにする。併せて、畜舎から貯留槽や汚水処理施設に至る経路を点検し、雨水が流入している場合は補修する。

畜舎の洗浄は、水道ホースによる洗浄よりも、高圧洗浄機を用いる方が効率的で節水効果も高い。

2 尿汚水の臭気軽減対策

尿はふんと混ざることにより、アンモニアが発生しやすくなるので、尿貯留槽を備えた畜舎では、尿にふんが混入しないよう適切に除ふんする。尿汚水の貯留槽にはふたをして臭気が発散しないようにする。